

1920年代におけるアメリカの日本像

「イメージ研究」の一試論

麻 田 貞 雄

ある国民もしくはその指導層が他の国に対して持つイメージが、国と国とのつき合いのうえに大きく作用することに、第二次世界大戦以後、社会科学者の活発な関心が向けられるようになった。もちろん、イメージの影響度を正確に示すことは、いたってむづかしい。しかし疑いなく、他国についての観念や態度は、軍事力、経済、人口、資源、地理的条件などの要素、力の均衡における位置、あるいはそれぞれの「国家利益」といった、より漠然とした概念と並んで、国家間の関係を規定する重要な一要素である。というのは、ある外国についてのイメージは、その国の客観情勢や事実自体の把握のしかたにも大いに関係があり、ほとんどあらゆる政策決定に影響を及ぼすからである。冷戦下の宣伝戦、またより広い意味で、著名なアメリカ史家 Daniel Boorstin がいう「イメージの時代」¹⁾を背景に、「イメージ研究」が、この問題を組織的に取り扱う新しい分野として登場してきたのも、当然と言わねばならない²⁾。

日米関係史の研究を進めるにあたり絶えず痛感させられることであるが、外交文書など通常外交史家の対象となる龐大な資料をいくら調べても、日米関係のダイナミックスを明らかにすることはできず、水上に現われた氷山の一角を知りうるに過ぎない。したがって、日米関係史の研究には、どうしても「国民的イメージ」の問題に立ち入る必要があるように思われる³⁾。ここで「イメージ」というとき、単なる「世論」

American Images of China and India (N. Y., 1958) が特に示唆的である。歴史学とイメージ研究との関係については、John J. Appel, "Historiography and the Study of the American Image," *The Mississippi Quarterly*, XVI, No. 1 (Winter 1962-63), pp. 23-34 があり、アメリカのヨーロッパ観に関する最近の歴史的研究では、Cushing Strout, *The American Image of the Old World* (N. Y., 1963) が注目される。

日本人による研究には、たとえば Shigeto Tsuru, "Japanese Images of America" (in Arthur M. Schlesinger, Jr. and Morton White, eds., *Paths of American Thought* [Boston, 1963], 492-514) や、加藤周一「日本人の世界像」および唐木順三「外国人の日本観」(いずれも『近代日本思想史講座』第八巻、筑摩書房、1961年に収められている)がある。

3) 日米外交史を上のような観点から取り扱った本格的な研究は、まだあらわれていない。Eleanor Tupper and George E. McReynolds, *Japan in American Public Opinion* (N. Y., 1937) は、分析に乏しい皮相なものである。William L. Newmann は、最近の概説書 *America Encounters Japan: From Perry to MacArthur* (The Johns Hopkins Press, 1963) よりもむしろ、"Ambiguity and Ambivalence in Ideas of National Interest in Asia" (in Alexander DeConde, ed., *Isolation and Security* [Duke University Press, 1957], 133-58) や "Determinism, Destiny, and Myth in the American Image of China" (in George L. Anderson, ed., *Issues and Conflict* [University of Kansas Press, 1959], 1-22) などの論文の中で、アメリカの極東外交とイメージの問題に興味深くふれている。

1) *The Image: or What Happened to the American Dream* (N. Y. 1962). Boorstin の野心作は、歴史的展望を与えるというよりは、むしろ憤慨調の現代文明批判に堕した観があり、彼は、アメリカ人が実体の把握、理想の追求を忘れて、安っぽいイメージの大量生産がつくりだした幻想の世界に満悦して住んでいるさまを暴露することに重点をおいているように見える。

2) わたくしの知るかぎり、イメージ理論の最も示唆に富む体系的展開は、Kenneth E. Boulding の *The Image: Knowledge in Life and Society* (University of Michigan, 1961) の中に見いだされる。この書で彼は、イメージを知的「形態」とみて、あらゆる分野における知識を、実体についての心像の形成という観点から説明しようとする。

社会学的、心理学的方法を用いる特殊研究としては、Harold R. Isaacs, *Scratches on Our Mind:*

を意味するのではない。むしろ、わたくしの試みようとするのは、アメリカ人の対日世論を、その根源まで掘り下げ、底流にうず巻く感情をさぐることなのである。アメリカの政策立案者や世論指導者がとる公の見解や態度に見られるものは、すでに意識生活の中に結晶された、顕在的な「日本観」であった。しかしその下に、いまだ完全に意識化されない、しばしば相反するさまざまなイメージと、それにまつわる感情とが潜在していた。このような、いわば生のイメージが、表面化された「見解」の素材となったのであり、その形成過程において、このような感情が刺激を与えたのである⁴⁾。

アメリカ国民の日本像を理解するための一つの手がかりとして、上のような仮のわく組を考えてみた。もちろん、アメリカ人の日本像といっても、個人個人によって相異ったイメージがあるため、アメリカ国民の日本像について一般化すること自体が無理なように思われるかもしれない。しかし実際に多くのアメリカ人の日本像を調べていくと、個々の差異は案外小さく、驚くほど幅広い共通性が見いだされる。というのは、彼らはアメリカ人として、共通の視野と経験とを持っていたからである。このゆえに「国民的イメージ」を論じることが可能なのではなからうか。

ではここでさらに焦点をしぼって、われわれのいうイメージを、アメリカ人の集団的経験——意識的なものにせよ、無意識的なものにせよ——を映し出すところの反射鏡と定義してみよう。そこには、彼らの国民感情、価値観、好み、偏見などが投影されている。この意味で、外国についてのイメージは、自国のイメージと言うことができよう。イメージは、さまざまな社会的欲求を満たす性格を持っている。人間は、自分の住む社会に対して常にいくらかの不満を感じているものであるが、それが外国に

関するイメージの中に反映する。したがってこれらイメージは、他の国についてある場合には理想化し、ある場合には悪意に満ちた映像を描きだし、ごくまれにしか実体の正確な像でありえない⁵⁾。

この試論では、個々の日本観ないしイメージが、実際当を得たものかどうかを吟味することは重要でない。むしろ、アメリカ国民の日本像を明らかにすることによって、アメリカの社会・文化の一隅に光をあてようとするのである。アメリカの日本像は、日本についてよりもアメリカ人の性格について、はるかに多くを語っているからである。

この目的のためには、特に1920年代を取り上げるのが適切と思われる理由がいくつかあげられる。まず第一に、20年代は、さまざまな社会的矛盾や緊張の目だった複雑な時期として、アメリカ史の上で最も興味深い時代の一つと思われる。近年アメリカ史家の間で、20年代をアメリカの重要な転換期とする解釈がなされているが、これによれば、この十年間は、アメリカ国民が19世紀的なアメリカから脱皮して、はじめてほんとうの意味で20世紀の世界に対処していくことを迫られた時期である⁶⁾。20年代の日本観もまた、この対処のしかたを当然反映していたと考えられる。

また1920年代は、アメリカに大衆社会の現象が現われた時代であり、新聞雑誌をはじめ、安価な書物やパンフレット類などの発行部数が大幅にふえている。この時代になって、われわれがいう意味での「イメージ」が重要なものとなってくる。以前には教養ある少数者の趣向に過ぎなかった「日本もの」が大衆化し、20年代には

4) 上に述べた仮説は、John H. Gleason の特殊研究 *Genesis of Russophobia in Great Britain: A Study of the Interaction of Policy and Opinion* (Harvard University Press, 1950) の中で最も効果的に適用・展開されている。

5) Isaacs, *Scratches on Our Mind*, 381, 383, 390, 391; Robert S. Schwantes, *Japanese and Americans: A Century of Cultural Relations* (N. Y., 1955), 38. また、Walter Lippmann の古典的名著 *Public Opinion* (N. Y., 1922) は、“stereotypes” について鋭い分析を行なっている。

6) この見解は、William E. Leuchtenberg, *The Perils of Prosperity, 1914-32* (University of Chicago Press, 1959) によって、最も明快かつ興味深く展開されている。

日本熱の驚くべき高まりが見られた。1923年に *Missionary Herald* 誌は、アメリカ人の日本に対する関心が、前のどの時代よりも大きいと評したが⁷⁾、当時、主要な雑誌はきそって「日本特集号」を出し、「日本の真随」、「神秘の日本」、「日本の謎」、「日本の夢と現実」などと題する数々の記事を掲げた⁸⁾。日本像の大衆化にとともに、イメージの内容にも変化が見られ、すでに触れたイメージの非現実性がよりいっそう強く出てくるようになる。

この論文で1920年代を選んだいま一つの理由は、当時アメリカ人が抱いた日本のイメージが安定していて、分析が割合容易だということである。ワシントン会議(1921-1922)から満州事変までの日米関係は、1924年の排日移民法を別とすれば、少なくとも表面的には一応平穏な友好状態にあった⁹⁾。したがってこの10年間のイメージを、あまり外的条件に作用されない、比較的純粋な形で抽出することができる。

ここで、当時アメリカ人の抱いていた日本像がどのようなものであったかを簡単に述べておく必要がある。最も目だった特徴は、イメージの二重性であった。さまざまなイメージを整理してみると、それらは、だいたい次のような対照的な日本像に還元される。その一つは、いうまでもなく、ロマンチックな「古い日本」であり、異国趣味は、1920年代においてもアメリカ人の日本観を強く性格づけていた。海のかなたの島帝国は、桜の花と優美な庭園とに象徴され

7) June 1923, p. 234.

8) たとえば, *Literary Digest* (Jan. 7, 1922); *Nation* (March 25, 1925); *Independent* (Jan. 20, 1923); *Outlook* (June 16, 1920).

9) 1920年代におけるアメリカの極東外交については、筆者の論文“Japan's 'Special Interests' and the Washington Conference, 1921-22,” *American Historical Review*, Vol. LXVII, No. 1 (October, 1961), pp. 62-70 を参照されたい。また、「妥協の外交—ワシントン体制をめぐる」(第一回アメリカ研究者会議のシンポジウムで発表, 1964年1月)。

日本人移民問題は太平洋岸諸州の地域的な偏見によるものであったため、この論文では、日本に関するアメリカ人の国民的イメージとの関連においてのみ触れることにする。

る幻想的な楽土としてとらえられていたのである。

他方、この日本像に対して、進歩的な工業国としての近代的イメージがあった。周知のように、日本の飛躍的な発展に対して父親のような誇りと関心をよせたアメリカも、20世紀初頭、日本が世界の列強の仲間入りをするや、疑いと恐れを抱くようになった¹⁰⁾。すでに1920年までには、日本に関する大衆的イメージは、二つの対立的な固定型——「桜の花びら」と「黄禍の恐怖」(yellow peril)——に両極化をとげていた。

上に見たような類型をいろいろの角度から検討してみることににより、アメリカの日本観を明らかにしたいと思う。あらゆるイメージは、「対象が、どのような条件のもとでながめられるか——背景、タイミング、視角、照明度、距離など——によって決定される」¹¹⁾とすれば、われわれの第一の課題は、イメージの源泉および形成の過程をたどることにある。また、アメリカ人と日本人との人間接触の問題も取り上げなければならない。第二に、日本のイメージに対するアメリカ人の感情的反応を分析する。アメリカ人の日本観は、二つの相反する感情によって織りなされたものであった。第三に、いくつかの集団や職業層を取り上げる。彼らの日本観は、日本がどのような動機、目的、利害関心をもってながめられたかによって大きく規定される。たとえば日本を顧客、仮想敵国、改宗者、あるいは異国趣味の対象のいずれとして見るかによって、異ったイメージが作り出されたのである。最後に、当時の日本観に見られる数々のパラドックスを、20年代のアメリカ社会・文化の特徴的な様相と関連づけて解釈してみたいと思う。

× × × ×

10) アメリカの対日観を決定的に悪化させたのは、第一次世界大戦および対華二十一箇条要求であった。アメリカ参戦の二ヶ月前 Woodrow Wilson 大統領は、「黄色人種」(日本)の脅威に対して「白色人種」の勢力を維持する必要について閣議で発言したことがあった。David F. Houston, *Eight Years with Wilson's Cabinet* (Garden City, N. Y., 1926), I, 229.

11) Isaacs, *Scratches on Our Mind*, 390.

ある特定の時代におけるイメージのみを分離して描きだすことはできない。というのは、それは過去からのすべてのイメージが積み重なって作り上げられているのであって、古いイメージは潜在化することはあっても、全く消えうせることはないからである。したがって、個人の外国観を理解するためには、その幼少時代の印象にまでさかのぼらねばならない¹²⁾。たとえば、1920年代に「日本問題」のヴェテランとしてなお論壇で活躍していた William E. Griffis は、小さいころペリー提督の東洋遠征を見送った時の記憶がいかに忘れがたいものであるかを記しているが、彼の世代の人々にとっては、あのロマンチックな時代は、いまだ遠い歴史の一コマとなっただけではなかった¹³⁾。紙のちょうちんや扇と連想づけられた日本は、彼らの子供時代の夢想の中で一つの位置を占めていたし、またそれは後年の日本観の中に持ち込まれたのであった。

感受性の強い幼い心に、まず最初に日本の映像を灼きつけたのは、小学校の歴史や地理の教科書であった。その中に見られるのは、極度に異国趣味化されたイメージであり、ガイドブック式の最上級の形容詞を尽くして描きあげた「古い日本」の絵姿であった。たとえば、「国全体が、銀面の池をちりばめた大きな庭園」であり、そこではだれもが芸術家や詩人の心を持っていると述べられていた¹⁴⁾。日本人は、想像できないほど丁重で礼儀正しい国民であると書き、「褐色の肌の小さな子供たち」のみごとな行儀作

法をほめちぎったあたり、アメリカのやんちゃな子供に対するお説教的口吻をうかがうことができる。「子供天国」に住む花の笑顔の幼児たち、おとぎの国の庭園、極彩色のキモノなど、すべて若い読者を空想の世界にさそいこむものであった¹⁵⁾。彼らのあいだでは、この「あべこべの国」では何もかも普通とは逆で、日本語も下から上へと読み書きするものらしいというのが常識になっていた。この「変てこさ」のゆえに、日本はますます「不思議なすばらしい処」、「世界で一番興味ある国」とされたのである¹⁶⁾。

他方教科書は、日本人を進取の気性に富む東洋のヤンキーと呼び、その近代的発展について記してはいたが、二つの日本のうち、おもちゃのような国というイメージのほうがより強くアメリカの児童の心をとらえたことは想像に難くない¹⁷⁾。

ロマンチックな映像は、子供たちの目にふれた日本の品物によってさらに強められた。真赤なキモノに包まれ、漆黒の髪とスベスベした妙な顔のお人形。おばあさんの集めた扇子やびょうぶ。版画、絵葉書、切手類¹⁸⁾。イマジスト詩人 Amy Lowell は、極東の各地でアメリカ公使をつとめていた兄 Percivall が送ってよこした東洋の美術品や日本についての本に囲まれて育ったが、彼女は次のように回想している。「私の幼年時代を通じて、これらの書物や美術品が、日本を私の想像の眼の中に鮮やかに浮か上がらせてくれたので、私は今まで日本を訪れたことがないなどという気になれない。」1910年代、20年代に Amy Lowell が書いた散文詩

12) *Ibid.*, 140, 408; Boulding, *The Image*, 6 を参照。

13) William E. Griffis, "Japan's Progress in Rebuilding an Empire," *Current History*, vol. 107 (Dec. 24, 1921) p. 682.

14) Frank G. Carpenter, *Asia: Carpenter's Geographical Reader* (N. Y., 1897), 16, 63; Mary Cate Smith, *The World and Its People, Book VI, Life in Asia* (N. Y., 1898), 181; Holmes, *Asia* (N. Y., 1924), 12, 84; Ralph S. Tarr and Frank M. McMurray, *Third Book: Europe and Other Continents* (N. Y., 1906), 407; Ellsworth Huntington, *Asia: A Geographical Reader* (Chicago, 1912; 1923 edition), 198; Frank M. McMurray and A. E. Parkins, *Elementary Geography* (N. Y., 1921), 278. Yale 大学図書館所蔵。

15) Smith, *The World*, 181; Huntington, *Asia*, 217.

16) *Ibid.*, 219-20; Carpenter, *Asia*, 15, 26; Jacques W. Redway, *All Around Asia: Redway's Geographical Readers* (N. Y., 1910); McMurray and Parkins, *Elementary Geography*, 279.

17) 前掲書のほかに, Longman's *School Geography for North America*, 329; Arnold H. Guyot, *The Geographical Reader and Primer: A Series of Journeys Round the World* (N. Y., 1882), 175; Wilbur Nichols, *Topics in Geography* (Boston, 1889), 156.

18) Holmes, *Asia*, 100-101; McMurray and Parkins, *Elementary Geography*, 279.

の多くには、日本的な素材と直喩とがちりばめられている¹⁹⁾。

子供たちがさらに上級に進むと、歴史の時間にマルコ・ポーロのジパング島の物語とか、コロンブスがこの黄金島を目ざして、新大陸を発見した話を教わった。小説が読める年ごろになると、ある者は屋根裏部屋のほこりの下からラフカディオ・ハーンの伝説を見つけだした。ハーンの著作は、彼独特の繊細な文体のゆえに、一般アメリカ人の日本像におそらく最も大きな影響を与えるものとなったが、それは、「いにしえの日本」のイメージをいっそう強固なものとしたのであった。ハーンが美しい霧の中に浮かび上がらせた日本人は、自然と調和した汚れない生活を営む国民、無上の礼節と献身的精神とを尊ぶ国民であった。そして彼らの先祖伝来の地は、大気までもが、見えざる靈魂に満ちた神秘の国として描かれたのである²⁰⁾。

アメリカ人の旅行者は、上に述べたようなロマンチックな国にあこがれて日本を訪れたのであるが、彼らが、日本についての大衆的イメージの形成に果たした役割は重要なものであった。1920年代には、訪日アメリカ人の数が著しくふえていることが注目される。1900年から1919年の間、年間約2000人から5000人であったが、1920年以後の10年間には、1929年の約8,500人を頂点として、総数55,364人に達する旅行者が記

19) Earl Miner, *The Japanese Tradition in British and American Literature* (深瀬基寛他訳『西洋文学の日本発見』筑摩書房, 1959年), 57-60, 81-89を参照。

20) 前掲書, 39, 179-83。手ごろなハーン著作集として, Henry Goodman, ed., *The Selected Writings of Lafcadio Hearn* (N. Y., 1949) が便利である。

ここでハーンの影響というのは、一般の人々が頭に描く異国情緒の賛美者としてのハーンのことであるが、このような通俗観が浅薄なものであったことはいうまでもない。ハーンを単なる日本礼賛者、ロマンチスト、耽美主義者としてとらえる従来の見方を批判し、日本文化について「文化人類学」的な理論づけを試みた最初の外国人としてのハーンをやや誇張的に描いた新しい研究として、築島謙三著『ラフカディオ・ハーンの日本観』(勁草書房, 1964年)がある。

録されている²¹⁾。この時代になると、「新産業主義」と技術革新の結果として、中流階級のアメリカ人にも、海外旅行をする経済的余裕と暇とが与えられるようになった。日本への旅行者は、自分たちの断片的な印象や経験を一般化して彼らなりの日本像を描きだした。そしてそれが、旅行記や、すでに上で触れたマス・メディアを通して、直接自分の目で日本を見たことのない大衆読者の間に波及的に広められ、日本に関する通俗的イメージに大きく作用したのである。1920年代には日本紀行文学の流行が見られた²²⁾。

旅行者たちの先入見は、彼らがじかに日本を観察した後も根強く残り、多くの場合それによりかえって強められる傾向があった。旅行者たちは、彼らが前もって心に描いていたものを、日本で見いだしたのである。ヨーロッパを遍歴するアメリカ人は、自国と旧世界とを結ぶ数々のきづな——共通の文化遺産とか祖先の墓石——を発見したが、それに反して、日本漫遊を試みる者は、全く異質的な文化の感触を求め、異国情緒にひたることを目的としていた。しかしながら、この「物珍しい」日本は、アメリカ人にとっては、不思議となじみ深い国であった。それは、いつか来たことのある国——なつかしい子供時代、夢想の中で遊んだあの「いにしえの日本」——であった。逆説的な言い方をすれば、アメリカ人にとって、日本は、珍異であること自体がなじまれている国であったのだ²³⁾。

では、いま少し詳しく旅行者の反応をながめてみよう。彼らが、あらかじめ強い非現実感に条件づけられていたことはすでに触れた。船会社や旅行社の広告も、神秘の国、うら悲しい旋律に合わせて舞う乙女の楽園を謳っていた。日本へのいざないの言葉は、「夢がほんとうとなり、うっとりさせるような優美な扇子の中から

21) Schwantes, *Japanese and Americans*, 9.

22) この時代に出版されたものは、Yale 大学図書館に所蔵されるものだけで約30冊を数える。

23) Lieutenant Melvin F. Talbot, "Thoughts on Leaving the Orient," *Atlantic Monthly*, vol. 147 (June 1931), p. 769.

東洋が現われる」といった類のものであった²⁴⁾。旅人が日本に上陸するなり、『不思議の国のアリス』の主人公が「鏡ガラスの国に迷い込んだように、何かのまちがいで絵本の中に足を踏み入れてしまった」かのような錯覚におそわれたとしても、あながち無理はない。狭い道をひしめき往来する「背の低い黄肌の男女は、どこからともなく真空地帯から姿を現わし、この俗世とは何かかわり合いも持たない」ように思われたし、紙と木でできた小ざっぱりした家は、「人形の家を、人が住めるように引き伸ばした」ものと映った。アメリカ人たちは、「永い夢」からまだ完全に目ざめていないかのようにであった²⁵⁾。

碧眼の一巡礼者は、「散り落ちる桜の花びらと、褐色の路面、褐色の家、褐色の人々が織りなす美しい明暗の模様」、またさまざまな快い調和音のかもしれないあやしい雰囲気に心を奪われ、いつしか「天国の門を目ざして天上界の郊外を旅している」幻覚におそわれたと記している²⁶⁾。呪縛するような異国ニッポンの魅力は、多くの旅行者によって語られているが、1919年に来訪したプラグマティスト哲学者 John Dewey でさえ、「不思議な、半ば魔法の国」という感じを禁じえなかったと、彼の日本通信の中で告白している²⁷⁾。

このような非現実感に根ざした日本観は、日本人の精神構造が欧米人のそれと本質的に異なっていると見る見方につながるものであった。この説によれば、西洋人なら泣くときに笑い、笑うときに泣く、あの「不可解な東洋人の心」“the inscrutable Oriental mind”は永遠の謎

であった。「微笑、沈黙、神秘」“One, a smile; Two, a silence; Three, a mystery” という日本人寸評が、この考え方を端的にあらわしている。ある旅行者は問いかけている。ラブカディオ・ハーンでさえ、西洋人は、「逆向きの、上下・裏表あべこべ」の論理に立つ日本人の思考様式を体得することなしに、彼らを理解することはできないと言ったのではないか。またあるアメリカ人は、次のような警句を発している。「日本人を理解すると言う者は、女性の心理を解するとうぬぼれる男のようなものだ。」²⁸⁾

このような前提のゆえに、異国的なものの探索者は、自らを、日本人との意味ある人間接触からますます切り離す結果を招いたのである。当時の高名な旅行家 Julian Street は書いている。「かつてこれまで、日本ほどわたくしを引きつけた国はない。こんな短かい滞在で、これほど多く目新しい事物に接することのできた国もない。しかも、これぐらい断片的でわけのわからない観察しか得られなかった国も、またほかにはない。」*Saturday Evening Post* の Isaac F. Marcossou は、「外国人は長く日本に住めば住むほど、日本がわからなくなる」というハーンの言葉が正しいと証言した²⁹⁾。

通り一遍の旅行者は、普通、日本の異国情緒に満悦して帰っていったが、もっと長期間にわたって日本に在留したアメリカ人——商社員、ジャーナリスト、著述家、教師など——の多くは、「全くうんざりするような経験」を持ったのである。幻想によって形成される日本像が、現実からあまりにもかけ離れたものであったため、彼らが実際の日本に接しはじめると、幻滅やフラストレーションを感じることになる。それが幾度となくくりかえされるうちに、来日当時の熱狂的な日本心酔が、不信感、さらに嫌悪にすら変わっていった多くの例を見ることができる。

24) *Asia*, vol. 23 (Oct. 1923) p. 767; vol. 27 (June 1927), p. 517.

25) Holmes, *Asia*, 101; *Missionary Herald*, vol. 118 (Jan. 1922), p. 18.

26) Julian Street, *Mysterious Japan* (Garden City, N. Y., 1922), 18, 21-22; Sydney Greenbie, *Japan, Real and Imaginary* (N. Y., 1920), 6; Holmes, *Asia*, 14.

27) たとえば, “Odd Folks and Ways in Japan,” *Literary Digest* vol. 72 (Jan. 7, 1922), pp. 38-44; John Dewey, *Letters from China and Japan* (N. Y., 1920), 18.

28) Ellery Sedgwick, “The Japanese Mystery,” *Atlantic Monthly*, vol. 146 (Sept. 1930), 289.

29) Street, *Mysterious Japan*, 48, 56-57, 63; Isaac F. Marcossou, “The Changing East—Japan in Transition,” *Saturday Evening Post*, vol. 195 Sept. 30, 1922), p. 26.

エキゾチックな魅力が新鮮度を失うにつれて、同じ日本像のもう一つの要素、つまり「不可解な日本人」のイメージが優位を占めるようになったのである。ある落胆したアメリカ人は、日本なんてつまるところ「蜃気楼のようなものだ」と言い捨てた³⁰⁾。

在住アメリカ人の多くは、「異質文明の壁」によって一般日本人の生活から遮断されていた。彼らは、日本人が愛想よくて親切な国民であることを認めるにやぶさかではなかったが、なんとなく親近感を欠くお客様扱いに強い不満をいだいた。気質上の大きなギャップ、つまり日本人の遠慮癖や形式的な「礼儀正しさ」と、アメリカ人の好むあけっぱなしの「気さくさ」の間の食い違いが、緊張感を生み出し、真の相互理解と親交を妨げるのであった³¹⁾。アメリカ人がしばしば中国人の中に感じとった「人なつっこさ」や「知己感」が、日本人に関する彼らの記述にあまり見あたらないのが対照的である³²⁾。

このように、人間接触の面では失望したアメリカ人も、知的なレベルでは、ほとんど例外なく日本の美点をほめちぎって、アメリカに与えるべきすばらしい文化を持つ国だと、紀行記に書きたてた。このような日本礼讃が、一般アメリカ人の抱くロマンチックな日本観にあずかっ

て大いに力があつたのである。心と心の触れ合う暖かさから絶縁されて非人格化された日本像は、高度に抽象されたものであつた。それは、血の通った人間としての日本人を描いたのではなく、夢と芸術美によって形成されるシルエットに過ぎなかつた。このエキゾチックな幻想に対して、アメリカ人はプラトニックな愛情をよせたのであつた。パール・バック女史のベスト・セラー『大地』に該当するような、写実主義的小説が、日本を背景として書かれることがなく、アメリカ人の前に、日本人の真の姿が生き生きと同情的に写し出されることがなかつたのは、あながち偶然とは言い切れないであろう。

× × × ×

上に述べてきたような日本のイメージに対してアメリカ人は、複雑な、多分に分裂症的な反応を示した。一つの態度は、日本を古代的な素朴さや汚れなきものと連想づけ、自然とつけ合つた日本人の生活を理想とみるものであつた。簡素さへの喜びは、1920年代のアメリカにおける機械文明の中では忘れ去られているように思われた。そして、アメリカ人も日本を手本として、昔ながらの美しい暮らしをいくらかでも取りもどすべきだと主張した。アメリカ人の旅行者のある者は、「非情な欧米文明」に毒されていない「古い日本」の情趣を探し求めた。満ちたりた日々の勤労、しあわせそうな笑顔、やさしい心づかい……これ以上のなにもものを人生から望みうるだろうか³³⁾。彼らは、日本の田舎の中に「静けさの境地」、純情さ、こまやかな感受性を発見した。この平和境に、現代の狂騒に倦み疲れたアメリカ人は、心の和らぎと憩いを見いだし、「何か昔なつかしい」「魂のふるさと」を取りもどしたかのように感じたのである。淡い郷愁感にいろどられた田園的日本像のシンボ

30) Greenbie, *Japan, Real and Imaginary*, 16, 437; Joseph I. C. Clarke, *Japan at First Hand* (N. Y., 1919), xix; L. S. Kirtland, *Samurai Trail* (N. Y., 1918), 79-80; Harry Frank, *Glimpses of Japan and Formosa* (N. Y., 1924), 8; Theodore Geoffrey, *An Immigrant in Japan* (Boston, 1926), 188; *Saturday Evening Post*, vol. 197 (May 2, 1925), p. 21; William Irvine, "Hybrid Soul of Japan," *Current History*, vol. 19 (March 1924), p. 1054.

31) 日本人と外国人との接触の問題を一般的に取り上げた、異色ある論文として、武者小路公秀「世界化時代と日本人——国際理解の社会的構造」(『中央公論』1964年11月号)が注目される。

32) 極東駐在のアメリカ公使館付き海軍武官のひとり、身のほどをわきまえている中国人には好感が持てるが、日本人は誇りが高く対等扱いを要求するので信用しないと語った。Notes on talk with Miss Scidmore, Kyoto, May 7, 1920, Vanderlip Papers, Columbia University.

33) Holmes, *Asia*, 189-90; Huntington, *Asia*, 215, 219-20; Street *Mysterious Japan*, 37; Harvy Hervey, "The Heavenly City," *Century*, vol. 108 (Sept. 1924), pp. 624-29; A. Adams Beck, "Unbroken Ways in South Japan," *Asia*, vol. 23 (April 1923), pp. 272-74.

ルは庭園であった。「桜と菊の国」という大衆的イメージは、アメリカ人の想像に異様なまでに強く訴える力を持っていた³⁴⁾。

このようなイメージはまた、日本人の芸術性を強調するものであった。芸術国としての日本は、古代的な素朴さとは対照的に、高度に洗練された複雑な文化形式を持つ国であった。ある教科書には、日本人は「世界で最も芸術的な国民」で、「古代ギリシヤ以来、日本ほど美を崇拜する国はない」と書かれていた³⁵⁾。洗練された国としての日本像は、アメリカ人の心の中に、女性的性格、陶磁器のように壊れやすい、きゃしゃな姿を浮き上がらせた。この繊細な日本は、とりもなおさず平和愛好国であると考えられたのである。

上にみてきた優美な日本像の裏面は、男性的性格によって貫かれたイメージであった。それは、サムライの伝統——刀の世界と強靱な意志力、ハラキリとミカドの信仰——を代表していた。芸術的、したがって平和的な日本のイメージと、軍国主義的な日本のイメージの間の隔たりは、考えられるほど大きなものではなかった。というのは両方とも、「神秘日本」あるいは「日本人不可解説」に立脚した、非人間化されたイメージであったからである。「日本人の本心」は計り知ることができないと考えられたため、それは容易にアメリカ人の疑いと恐怖の対象となりうるものであった。この見方によれば、表面は西洋化されていても、「真の日本」は、昔から一定不変であり、「日本という国は、変われば変わるほど同じ国」であったのである³⁶⁾。この

原始的な、気心の知れない、無気味な日本人のイメージが、近代日本に関する妄説と結びついたとき、あの「黄禍」の悪夢が触発されたのである。

そこで、日本の近代的側面に関するアメリカ人の考え方に目を移そう。日本の進歩発展を「奇跡」視する傾向は、開国前の日本が未開の国であったという前提に立っていた。したがって、新旧二つの日本の対照が著しく誇大され、日本の近代的発展を突然変異的な現象とする見方がなされていた。わずか半世紀のうちに、「月世界のようにかけ離れた珍奇な」未開国が、一足飛びに「最も進歩的な列強の一つ」になったと考えられたが、この「ほとんど不可能な」事業は、アメリカ大衆の目に、あたかも魔法のランプによる奇跡のようにすら映ったのである³⁷⁾。

日本の進歩に対して、アメリカ人は拍手を惜しまなかったが、また反面、1920年代においても、時代錯誤的な語調で工業化を嘆く傾向が著しかった。彼らは、欧米の産業様式の乱入が、「日本固有の文化に悲劇的な墮落」をもたらしたと考え、「富や商業上の支配を旨とす気違いじみた奔走」を慨歎した。多くのアメリカ人は、心の底ではやはり、西洋のまねをする日本よりも、キモノ姿の可憐な島国に愛着を感じたのであった³⁸⁾。

このような、消えゆく旧日本への未練や淡いノスタルジアも、アメリカ人の目がいったん現在、さらに未来に向けられたとき、より強烈な異質の感情によって吹き飛ばされた。1920年代

34) Street, *Mysterious Japan*, 21-22; Clarke, *Japan at First Hand*, 70.

35) *Ibid.*, 161-62; Huntington, *Asia*, 193, 198; J. T. Sunderland, *Rising Japan* (N. Y., 1918), 8-9; Sedgwick, "The Japanese Mystery," pp. 296-97; Dewey, *Letters*, 50.

36) Marcossou, "The Changing East," *Saturday Evening Post* (Aug. 12, 1922), p. 7; *ibid.* (Sept. 30, 1922), p. 26; Carl Crow, *Japan and America, A Contrast* (N. Y., 1916), 1; Montaville Flowers, *The Japanese Conquest of American Opinion* (N. Y., 1917), 263.

37) Walter B. Pitkin, *Must We Fight Japan?* (N. Y., 1921), 46; *Survey*, vol. 54 (Sept. 1, 1925), p. 549; "Japan's Miraculous Commercial Rise," *Literary Digest*, vol. 72 (Jan. 7, 1922), p. 28; Sarah M. Lockwood, "Japan—One Face East, One Face West," *World's Work*, vol. 59 (Dec. 1930), p. 49; Lothrop Stoddard, "The East Tucks in Its Shirt," *Reader's Digest*, vol. 7 (April 1929), p. 781.

38) Greenbie, *Japan, Real and Imaginary*, 100, 438; Odd Folks and Ways in Japan," p. 40; Lockwood, "Japan," p. 51; Dewey, *Letters*, 67.

のアメリカで、日本人の産業的・機械的「能率」を極度に誇大化し、ほとんど超人視する民間伝説が広まっていた³⁹⁾。近代日本に関するこの固定観念とサムライの国という古い日本のイメージとが結びつけられたとき、アメリカ人の間に危険感と恐怖とがもりあがったのである。黄禍思想を支えていた日本観は、一方では、欧米文明の持つ優位な力の条件——近代艦隊と軍隊、高度に組織化された権力構造や産業機構——を備えた日本であった。そして他方、それらを動かしていくのは、本質的な人間性を喪失した残忍な日本人であり、彼らは、命知らずの凶暴性、鉄の神経、そして驚くべき団結力を持つ人種であると信じられていた⁴⁰⁾。1920年代の黄禍論者は、「あの小さな巨人国」とか「矮小なスーパーマンの国」など、好んで逆説的な言葉で日本を呼んだが⁴¹⁾、彼らには、日本人の小柄なことや皮膚の色までが、「狡猾さ」や「悪魔的」性格を連想させるように思えた。このようなもろもろのイメージが、アメリカにおける反日イデオロギーの底に横たわっていたのである。

日本恐怖症は、1920年から翌年にかけて日米関係が悪化した時期に、一つの頂点に達した

39) この観念は、第一次世界大戦中アメリカ人が抱いていた「非人間的」、「能率的」ドイツ国民のイメージが、戦後日本人に転移されたものとして、ある程度説明できる。

40) Crow, *Japan and America*, 55; *Current Opinion*, vol. 73 (July 1922); "Japan's Seventy Dazzling Years," *Literary Digest* (Jan. 7, 1922), p. 23; Frank, *Glimpses*, 123-24.

アメリカの「黄禍」思想については、Richard Thompson の学位論文 "The Yellow Peril, 1890-1924" (University of Wisconsin, Ph. D. thesis, 1957-58) があるだけで、まだ深い研究がなされていない。

41) これと関連して、「小さい」という観念が、「能率」のそれと結びついたとき、邪悪な、非常に恐るべきものを暗示したといえる。また、「yellow peril」の「黄色」は、このような概念に加えて「残忍さ」の意味合いを含んでいた。

対照的に、「brown little men」の「褐色」は、「後進性」—「軟弱」—「無害」—「好感のもてる」などといった性格を連想させた。したがって、「子供天国」の日本の幼児は、実際の皮膚の色とは関係なしに

が⁴²⁾、その根強い症候は、1920年代を通して幾度となくあらわれていた。この現象は、日本人移民排斥の伝統を持つ太平洋岸諸州（特にカリフォルニア）を除けば、ハースト系の煽動的な新聞に最も著しかった。約三百万人の支持層を持つハースト新聞王は、以前から黄禍の幻影に取りつかれていたが、1920年代においても、彼は強い偏見を国全体に広めようと奮闘を続けていた。彼の主張があまりにも極端論であったため、アメリカ国民の大半はそれを額面通りに受け取らなかった。彼らは、ハーストの打ちならす大げさな警鐘にはすでに不感症となっていたのである。

しかし反日宣伝は、良識ある雑誌編集者を憂慮させた。*Literary Digest* は、「妄想的な争点をヒステリックにかき立てる」ことを強く非難した。「なぜ日本を、絶えず疑い監視しなければならない敵と決めてかかり、日本に対して軍備を整え、最後には戦わねばならないと口やかましく叫ぶのだろうか。」同誌は、その背後に「人種的憎しみ、海軍の野心、人間の貪欲」があるとみた。*New Republic*, *Nation*, *Independent*, *Outlook* はこぞって、日米戦争不可避説を危険視する論説を掲げていた⁴³⁾。

反日論者たちは、日本を「世界征覇狂」とか、「アメリカのみならず文明全体に対する脅威」として描きあげたのであった。日本人は、豪胆と技能を要する仕事ならなんでもしてのける国民で、アメリカに対して申しぶんない攻撃態勢を

「brown little children」と呼ばれた。またアメリカ人の宣教師が、「yellow」よりむしろ「brown」の形容詞を好んだように見受けられるのも興味深い。

42) *The New Japanese Peril, The Menace of Japan, The Japanese Invasion, The Japanese Conquest of American Opinion, Must We Fight Japan?* といったような煽動的な題の本が、当時読まれていた。

43) Ida M. Tarbell, "That War with Japan" (editorial), *Outlook*, vol. 124 (March 17, 1920), p. 460; *Independent*, vol. 105 (May 7, 1921), p. 481; "Squelching Japanese War-Scare," *Literary Digest*, vol. 84 (Jan. 3, 1925), p. 3, 6; "Preparing War with Japan," *Nation*, vol. 120 (May 27, 1925), p. 589.

整えているというのである。もし日本をこれ以上のさばらせるならば、「次はアメリカのやられる番だ」などとささやかれた⁴⁴⁾。1920年代の「ジャズ時代」を描いた F. Scott Fitzgerald の小説 *This Side of Paradise* の若い主人公 Amory Blaine は、日本軍が侵略して来れば大てがらをたてて、世界で一番若い将軍になってやろうなど、空想にふけりながら、眠りに落ちるのであった⁴⁵⁾。すでに「アメリカ随一の日米開戦予言家」の異名をとっていた Richard Pearson Hobson 海軍大佐は、1920年の初め、またもや戦争の切迫を警告していた。1925年1月、Fred A. Britten 下院議員は、「日本による公然の戦争準備は、太平洋に面する白人種国民に、断固たる防衛策を講ずることを余儀なくせしめる」との決議を提案して世論を騒がせた⁴⁶⁾。

アメリカ海軍は、その伝統的な対日不信感のゆえに、これら反日論者たちの言葉に特に動かされやすかった。アメリカの海軍士官たちは、日露戦争以来、アメリカが将来必ずや日本と一戦を交えることをかたく信じて疑わなかった。「オレンジ国（日本をさす）作戦計画」は、日本を第一の「仮想敵国」としていた⁴⁷⁾。

アメリカ海軍の対日恐怖症は、従来、非協力的な議会からなるだけ大きい海軍予算を勝ち得るための方策として説明されてきた。しかしそれは、けっして単なる見せかけではなくて、アメリカ海軍内部の反日イデオロギーに根ざして

いたのである。海軍将官たちは、「東洋人の心」を他のだれよりも深く解すると自負していたが、彼らによれば、軍国的心理をもつ日本人を牽制する唯一の手段は、力による威嚇であった。海軍内の最高政策機関であった将官会議 (General Board) のメンバーは、日米間に存在する数々の相違——政治体制、教育、価値観、その他習慣や精神構造における差異——を重大視し、このような越えがたい溝があるかぎり、日米対決は不可避であるとみた。したがって彼らは、日米関係の安定化、長続きのする平和は、アメリカが、太平洋上で圧倒的に優勢な海軍力を作りあげることによってのみ可能であると主張した。彼らの目に映った日本は、気位高く、侵略的で復讐心の強い国、軍部による独裁国家であった⁴⁸⁾。

日本の「プロシヤ的軍国主義」に対して、アメリカの海軍将官は、軍事面はいうにおよばず、通商・政治・思想上の「脅威」を感じていた。彼らは、日本が極東・太平洋の全域にわたり支配権を打ち立てる野心に燃えていると信じており、アメリカが積極的に阻止しなければ、日本は「千年の長きにわたり世界に独裁政を横行させるような」巨大勢力にのし上がるであろうと警告した。アメリカ海軍が何よりもおびえていたのは、太平洋の制覇をめぐる空前の人種の死闘の幻影であった。彼らの主張によれば、日本がひとたびアジア大陸の自然・人的資源を手

44) "Behind the Dreadful Mask," *Sunset*, vol. 45 (July 1920), p. 32; A. Hamilton Gibbs, "Moral Preparedness for the Next War," *Survey*, vol. 45 (April 1, 1927), pp. 10-13; Crow, *Japan and America*, 301-303; Frederick McCormick, *The Menace of Japan* (Boston, 1917), 346-47; Sidney Osborne, *The New Japanese Peril* (N. Y., 1921).

45) (Penguin Book edition), p. 24.

46) *Independent*, vol. 105 (May 7, 1921); *Literary Digest* (Jan. 3, 1925), pp. 3-4.

47) アメリカ海軍の対日観に関する上の記述は、ワシントンの National Archives や、海軍省 Naval History Division に保存されている未公開の記録に基づいている。これらの資料の中で特に興味のあるのは "Orange War Plans" である。(Folder 139, Op.-29, folder no. 4, War Portfolio, No. 2, Asiatic Station, Jan. 1919; Folder 141, Op.-29, folder No.

6, War Portfolio, no. 3; General Board No. 425, serial No. 425, Strategic Survey of the Pacific, April 26, 1923). 対日海軍政策に関する研究には、Louis Morton, "War Plan Orange: Evolution of a Strategy," *World Politics*, XI (Jan. 1959), pp. 220-50; Gerald E. Wheeler, *Prelude to Pearl Harbor: The United States Navy and the Far East, 1921-1931* (University of Missouri Press, 1963) などがある。

48) General Board, the Department of the Navy, *Report of the General Board*, No. 1 (National Archives), pp. 8, 11, 14-15, 16, 24. その他、ワシントン会議に関連して作成された数々の調査資料が参考になる。

Army and Navy Journal, Jan. 28, 1922; Feb. 25, 1922; April 1, 20, 29, 1922; July 29, 1922; June 7, 1924; Sept. 20, 1924.

入れたならば、日本の主宰の下に「黄色民族が統一」され、「東西間に鋭い人種の対立」が生じるであろう。そして、「有色人種の押し寄せる波」は不可抗的に太平洋を東漸し、アメリカの安全、ひいては白人の優越をも脅かすにいたるであろう、というのである。このような黄禍論は、アメリカ海軍の作成した報告文書にも顕著にあらわれていたが、その中には、当時の人種思想の信奉者たち——特に Lothrop Stoddard——の強い影響が見られる⁴⁹⁾。

ワシントン会議が日米間の主な争点に一応妥協をもたらした後も、海軍将官の対日不信感、消えなかった。彼らが強硬に反対した海軍軍縮条約が成立をみたことは、かえって彼らの日本に対する不信に拍車をかける結果となった。20年代の「日米友好時代」を通じて、日本を「陰謀にたけた」、「信義を守らない」、「侵略的」な国とするアメリカ海軍の確信は、いささかもゆるがなかったのである⁵⁰⁾。

1924年の排日移民法の成立直後、Hector C. Bywater は、『太平洋大戦：日米海戦史(1931-1933)』と題するセンセーショナルな書物を著わした⁵¹⁾。ちなみにこの本は、仮想の戦争の経過を克明に記録する形をとっているが、それは太平洋戦争の結末を驚くほどの確に予言している。Bywater はイギリス人であったが、当時アメリカで最も広く読まれていた海軍問題評論家であり、彼はおそらく他のだれよりも如実にアメリカ海軍（特に将官会議）の見解を反映し、それをだれよりも大胆に書きあらわしたのである。一方海軍の将官たちも、反日的な表明をおこなうことをけっしてためらわなかった。

49) “The Blue-Orange Situation,” secret, lecture of Captain Reginald R. Belnap, p. 2, 3, 27; Lothrop Stoddard, *The Rising Tide of Color* (N. Y., 1920), 239-31, 308.

50) United States Naval Institute, *Proceedings* (1923), pp. 823-24, article by Hector C. Bywater; *Army and Navy Journal*, Feb. 11, April 20, 1922.

51) *The Great Pacific War: A History of the American-Japanese Campaign of 1931-33* (London, 1925). Bywater は、United States Naval Institute の准会員であった。

Bradley A. Fiske 海軍少将は、日米関係のゆゆしい事態を指摘し、日本が極東で新しい侵略を始める危険性を認めていた。William L. Rodgers 海軍少将は、日本がアメリカとの戦争をすでに決意していると語り、Curtis D. Wilbur 海軍長官は、「文明のドラマの終幕は、太平洋上あるいはその周辺で演じられることであろう」と声明した。1924年12月 Coolidge 大統領の反対を押し切って議会は、台湾方面からの「敵国」がフィリッピンを攻略する可能性を調査しようとした⁵²⁾。

海軍の将官は、アメリカの貿易と門戸開放政策を守るためには、日本との武力対決もあえて辞さないという高圧的姿勢を示した。彼らは、アメリカが巻き込まれる次の戦争が、中国市場の争奪戦から引き起されることを確信していた。この見方の背後にあるものはもちろん、アメリカの中国貿易を過大評価する伝統であった⁵³⁾。しかしアメリカの実業家や資本家たちにとっては、海軍側の意気込みは、かえってありがた迷惑でしかなかった。というのは、中国における限られた経済的利権を守るために、アメリカのよりよき顧客である日本と衝突することは、彼らの最も望まないところであったからである。

以前、アメリカの貿易業界は、通商上の国際競争の中に割り込んできた日本に対して脅威を感じ、日本がアメリカ商品をアジア市場から閉め出そうとしていると考えて敵意を抱いていたが、1920年代になると、彼らの対日観は圧倒的に友好的なものとなる。*Wall Street Journal*, *Commercial and Financial Chronicle*, *Nation's Business* など、実業界・財界の有力紙は、日本との通商が至極満足すべき状態にあると報じ

52) *Army and Navy Journal*, June 7, 1924; Miriam Beard, “Our War-Advertising Campaign,” *Nation*, vol. 120 (March 25, 1925), pp. 322-23.

53) 1920年代のアメリカ海軍は、19世紀末の膨張主義者たちと似た見解、つまり中国市場をアメリカ国内の余剰生産品のはけ口としてきわめて重要視する考え方をとっていた。

ていた⁵⁴⁾。第一次大戦後日米貿易が著しく増大したことの重要な原因は、もちろん、アメリカの大きな繁栄にあった。また当時、従来の資本輸入国から資本輸出国に一変したアメリカは、日本に対しても公債・社債の応募や、企業への直接投資などの方法によって多額の資本輸出を行っていた。20年代には、日米経済関係の相互補完的な性格がいつそう強くなり、日本がニューヨークの金融市場、ピッツバーグの鋼鉄業にかたく結びつけられた結果、アメリカ実業家は両国の経済提携、パートナー的關係がさらに密接化されることを望んだのである⁵⁵⁾。またこの時代には、アメリカの資本家たちの間に、中国大陸における日米合同事業への関心が高まってきた。革命・動乱の続く中国に一時見切りをつけた彼らは、日本を極東における唯一の安定勢力としてきわめて重要視しており、日本の大陸事業にドルを投資するため、いくつかの借款を企てていた。

ウォール街は、上に述べたような理由で、日本と友好協力関係を維持することを切望していたので、日米戦争不可避説を「精神異常」だとして手きびしく非難したのである。*Wall Street Journal*によれば、日本はアメリカから金を借りることには戦争できないため、日米戦争は絶対にありえないのであった。海軍の将官たちが、通商上の競争は日米戦争を必然的にもたらすと説いたのに対し、実業界は、貿易こそ両国間の平和を保障する「親善のきずな」であると信じていたのである⁵⁶⁾。

54) *Commercial and Financial Chronicle*, April 1920, p. 1581; Nov. 27, 1920, p. 2089; Irving National Bank, *Trading with the Far East* (N. Y., 1820), 160-71; *Nation's Business*, Feb. 1929, p. 173.

55) 関東大震災後、復興事業のため多額の公債がアメリカ市場で募集され、また日本の電力開発事業に対するアメリカ人の投資が目だっていた。直接投資の重要なものは、自動車工業、蓄音機工業、石油会社に対する共同出資であった。開国百年記念文化事業会編『日米文化交渉史—通商産業編』(洋々社, 1954年), 30-37, 54, 410, 414, 432-38, 441.

56) *Commercial and Financial Chronicle*, Sept. 8,

アメリカの実業家が抱いていた日本像は、近代的側面を強調するものであり、「偉大な工業国」あるいは「進取的な文明国」といったイメージであった。日本は欧米の「利口な教え子」であり、西側世界の外では「われわれに最もよく似た」国であった⁵⁷⁾。彼ら実業家の見た友好国日本は、平和愛好国であった。1920年代までに彼らのあいだに、日本を信頼していこうとする態度が顕著となっていた。1920年に日本を訪れたアメリカ実業家視察団(団長 Frank A. Vanderlip)は、日本ほど「包み隠しのない友好的国交を望み、[国家間の]困難事を調整するため公正でりっぱな努力をいとわない国はほかにない」と断定した。また *Commercial and Financial Chronicle* の論説は、「われわれの任務は、日本のじゃまをすることではなく援助することであり疑うことではなく声援を送ることである」と説いていた⁵⁸⁾。

このように実業家たちは、自分たちの利害関係や、それに根ざす先入見を通して日本をながめていたが、彼らは、日本における実業家階級の台頭を日本の進歩と同一視する傾向があった。彼らの接した日本人の多くが、多かれ少なかれ、欧米的なものの見方をする大実業家や財界人であったことも影響して、彼らは日本の自由主義勢力を過大に評価しがちであった。「いまや日本は真に人民による政治に到達した。……日本がゆるぎない民主政の確立の方向へ着実に歩いていくことはまちがいない」という見方が、アメリカの実業家の間で支配的であった⁵⁹⁾。

1923, p. 1057; *Nation's Business*, Feb. p. 1929, 173; April 1930, p. 102; *Wall Street Journal*, Feb. 1, 1921, editorial; Sept. 29, 1921.

57) *Commercial and Financial Chronicle*, Dec. 24, 1921, pp. 2659-60; Sept. 8, 1923, p. 1057; Aug. 16, 1924, pp. 742-44; *Nation's Business*, Sept. 1920, p. 80.

58) *Commercial and Financial Chronicle*, Aug. 21, 1920, pp. 736-37.

59) *Ibid.*; *Nation's Business*, Sept. 1923.

アメリカの知識人たちは、民主国日本のイメージをいっそうあざやかに描きだした。*Nation* の Oswald Garrison Villard は、日本が遠からずして「世界の自由主義思想の強大な砦の一つ」になることを信じていたし、Herbert Croly の主宰する *New Republic*、Hamilton Holt の *Outlook* や *Independent* も、これと似た見解をあらわしていた⁶⁰⁾。Dewey は、やや興奮した調子で東洋旅行から書き送った。「日本の自由主義は、巨大な——ほとんど信じられないほど巨大な——躍進をとげた。」したがって、日本のリベラルな同志に対して暖かい支援を差し伸べることが、アメリカ知識人の責任であると考えられた⁶¹⁾。このような連帯感に根ざした見方のゆえに、アメリカの知識人は、日本における自由主義者の政治的指導力を過大視する結果となったのである。

実業家と同じくアメリカの知識人も、リベラルな日本は、平和を愛する国に違いないと考えたが、この確信は、インテリの日本芸術礼讃によってさらに強められた。彼らは、日本人の生活を深く観察すると、「自然を愛する心や簡素な暮らしへの喜び」、つまり軍国主義からおよそかけはなれた願望が国民生活の基調をなしていると主張したのである⁶²⁾。

しかし、客観的な立場を保とうとする知識人は、日本の過去における侵略的なものを全面的に否定してしまうことができなかった。1920年代に彼らの多くの者にみられた態度は、もっぱら西洋側（アメリカをも含む）の「落度」を鋭く追求することによって、日本を間接的に弁護

しようとするものであった。彼らのいささか自虐的な論理に従えば、日本の軍国主義や領土拡張政策に対する責任の大半は欧米側にある。というのは、かつて西洋先進国は、日本が強大な陸海軍を作りあげるまで対等扱いを拒み、結果的には日本に軍国主義を「押しつけた」からである。いまや日本は、西洋帝国主義の手本に従っているにすぎないのに非難攻撃的になっている、というのが一部のアメリカ知識人の主張であった⁶³⁾。

1920年代を通じて、インテリたちは深い幻滅と挫折感にさいなまれていた。彼らは、すでにパリ平和会議で民主主義の理想が Woodrow Wilson 大統領自身によって裏切られたと思いついでいたが、さらに上院によってヴェルサイユ条約が否決され、新しい世界秩序への夢が打ち砕かれてしまった後は、彼らは Wilson 的道德主義や救世者意識に反発した。知識人たちは、彼らが好んで「アメリカ帝国主義」とか「偽善外交」と呼んでこきおろした政策について、強度の罪意識を抱くようになった。そして彼らは、そのはけ口を情熱的な反帝国主義思想の中に見いだしたのである。

このようなムードの中で、当時進歩的インテリの代弁者とみられていた歴史家 Charles A. Beard は、次のように述べている。「非情な保守主義者たちは、フィリピン、ハイチ、ドミニカ、ニカラグア、その他アメリカ海兵隊の保護領における自由を踏みにじることを喜びとしたが、彼らの愛すべきかわいそうな中国人が所有する一片の領土〔山東半島〕が日本に占領され

60) Oswald Garrison Villard, "Japan—Enemy or Friend?" *Nation*, vol. 120 (March 25, 1925), p. 309; *Outlook*, vol. 124 (March 17, 1920), p. 747. *Outlook* と *Independent* には特に親日的色彩が強かった。Holt はニューヨークの Japan Society の有力な組織者の一人であった。

61) *Dial*, May 17, 1919, pp. 502-503. Dewey の極東旅行は、「彼の社会的、政治的思想の展開のうえに、疑いもなく一つの役割を果たした。」滞日中、彼は新戸辺稲造を通して日本のリベラリストと親しく交際した。Paul Arthur Schilpp, ed., *The Philosophy of John Dewey* (N. Y., 1939), 40.

62) Sunderland, *Rising Japan*, 7; "The Two Japans," *Nation*, vol. 112 (Feb. 2, 1921), pp. 172-73; "The Spirit of the 'Samurai,'" *Asia*, vol. 23 (Nov. 1923), p. 801.

63) Ida M. Tarbell, *Peacemakers—Blessed and Otherwise* (N. Y., 1922), 184; Mark Sullivan *The Great Adventure at Washington* (N. Y., 1922), 251; *Independent*, vol. 107 (Dec. 24, 1921), p. 307; Julian Street, "Hands Across the Pacific," *Current Opinion*, vol. 73 (July 1922), p. 28; William E. Griffis, "The Sorrows of a Non-Partisan," *Missionary Herald* (Sept. 1919), p. 369.

るのを見て、どういうわけかひどく心を痛めたのである。」⁶⁴⁾

知識人や改革主義者たちは、アジアにおけるアメリカの「帝国主義」を、日本のそれよりも警戒しているようにみえた。Croly は、アメリカが自己の利権を、日本や中国の犠牲のうえに強引に追求することを恐れ、Beard も、「アメリカは、二十一箇条を七倍もするおびただしい要求を突きつけても、中国貿易を支配するであろう」と警告した。革進主義者のレトリックにしばしばみられた反資本家的偏向を反映して Beard や Villard は、アメリカの貿易業者、投資家、利権屋の群れが「世界征服」をたくらみ、光輝あるアメリカ文明の恩沢——通商と浴槽——をアジアの僻地まで運ぼうとしていると皮肉った。これら反帝国主義者は、もし日本と争うことになれば、それはアメリカのおっぱじめる侵略戦争に違いないと信じていたので、彼らの目には、日本は平和を欲する被害者として映ったのである⁶⁵⁾。

日本派遣のアメリカ人宣教師は、日本弁護にかけては、他のどの集団にも増して積極的であった。当時アメリカから派遣されていた宣教師は、総数千人ばかりであったが、彼らの日本通信や報告書が、教会関係のパンフレットや雑誌を通してアメリカ人の日本像に及ぼした影響はけっして無視できない。多くのアメリカ人が日本人と親密な個人的つき合いを持ちえなかった中で、宣教師は例外であった。彼らはある程度、日本人の生活の巷に入っていくことができたし、彼らの日本人との交わりには、かなりの親近感

64) Charles A. Beard, "War with Japan: What Shall We Get Out of It?" *Nation*, vol. 120 (March 25, 1925), p. 312; Charles and Mary Beard, "Our View of American-Japanese Relationships," *Survey Graphic*, (May 1; 1926), p. 189. 周知のように Beard は関東大震災直後、復興計画について助言するため再度来日している。

65) Beard, "The Issues of Pacific Policy," *Survey Graphic*, vol. 56 (May 1, 1926), p. 189; *Nation*, vol. 120 (May 25, 1925), p. 322; *Outlook*, vol. 124 (March 17, 1920), p. 40; Sunderland, *Rising Japan*, 213; *Christian Century* (Oct. 8, 1925), p. 42.

がみられた。宣教師の便りの中に浮き彫りにされたイメージは、「熱心で敏感な、そして親切な」庶民たち、彼らの素朴な誠実さや日常の勤労姿であった。宣教師たちは人間の兄弟性を強調し、日本人もアメリカ人も、基本的には同じ喜怒哀楽や道徳観念を持っていると説いた⁶⁶⁾。とはいえ、宣教師の態度には、全く平等な人間関係というよりは、しばしば異教徒国民を迷える子羊とみる、潜在的優越感があったことは否めない。

長い任期を日本で過ごした「日本通」の宣教師たちは、徹底した日本びいきとなり、自分たちを日本と同一化したのであった。近代日本の黎明期において注目すべき貢献をなしたヴェテラン宣教師たち——たとえば William E. Griffis 博士——は、日本に対して大きい期待と「信頼」を寄せるようになった。彼らは、日本の世界的強国への成長を誇らしく見守り、自分たちの夢を日本の国家的願望に託したのであった⁶⁷⁾。多くの宣教師は、ある程度日本人の目で物事をながめ、日本人の尺度で判断すらした。その著しい例は、同志社で神学を講じたことのある Sidney Gulick 博士であった。彼は宣教師として日本で25年も生活するうちに、本国の事情や世論から疎くなってしまったが、アメリカ人にとって、日本代弁者としての Gulick の立場はしばしば客観性を欠くように思われた。たとえばかって彼は、対華二十一箇条を公に支持し、日本の韓国政策を弁護した。1920年代においても、Gulick は政治的手腕を発揮し、飽くことなくアメリカ中を廻って、移民問題に関して世論を

66) *Missionary Herald*, vol. 119 (Nov. 1923), pp. 498-99; *ibid.*, vol. 120 (April 1924), p. 163; Rosamond H. Clark, "Getting Home," *ibid.*, vol. 121 (Jan. 1925), p. 29; statements by missionaries Gilbert Boweles and Sidney Gulick, *Japanese Immigration Legislation*, Hearings before the Committee on Immigration, U. S. Senate, 68th Cong. 1st sess. (Washington, D. C., 1924), pp. 79-80, 92.

67) Griffis, "The Sorrow of a Non-Partisan," *Missionary Herald* (Sept. 1919), p. 369; *ibid.*, vol. 120 (Feb. 1924), p. 47, editorial; *ibid.*, vol. 120, p. 76.

喚起すべく活躍していた。

しかし多くの宣教師は、Gulickの親日的論理を全面的に受け入れることに対して良心の抵抗を感じていたので、彼らは知識人と同じように、アメリカ自身の「偽善」を攻撃することによって日本を庇おうとした。Griffis牧師は反問した。「米墨戦争や米西戦争などの後めたい過去を持つアメリカが、どうして日本に石を投げることができようか。」⁶⁸⁾

宣教師の日本観にも、彼らの立場に根ざす先入観が大きく作用していたが、彼らの日本理解は、概して日本のキリスト者から一般化したものであった。宣教師は、自分たちが日本の「最大の友」であり、また日本の信者こそアメリカの最も頼みにできる味方であると考えていたので、両国のキリスト者の「同盟」が、日米紛争を解決する道であると論じた。しばしばこの種の考え方は、平和の維持に対する日本人キリスト者の影響力を過大視し、日米関係を単純化してとらえる結果を招いた⁶⁹⁾。

以上いくつかの集団や職業層の日本観を調べてみて結論できることは、日本が、それぞれの立場や利害関心に根ざした先入主の眼鏡ごしにながめられ、また特定層の日本人との接触から一般化されたため歪んだり、片よったりしたイメージが生じたということである。1919年、当時の國務長官 Robert Lansing は、「ヒステリックな」反日論者があまりに「とほうもない」主張を行なうので、「もし彼らが他の問題に関しては正気であるのを考慮しなければ、彼らを精神異常者と断定するところだ」と述べたが、この現象は1920年代にも見られた。他方親日的な財界人や実業家たちは、Japan Societyなどの団体によって組織されていたが、アメリカ政府

筋は、日本政府がアメリカの「牧師、センチメンタリスト、平和主義者、名士、知識人」の間の親日家たちを巧みに利用して、アメリカで大規模な宣伝運動を繰り広げていると信じていた。アメリカの対日世論の激しい分裂について、Marcossonは次のように評している。「日本が話題に上るやいなや、“pro”と“anti”という言葉がとびだしてくる。この島国について書かれたものはすべて、そのいずれかでなければならぬという不文律があるらしい。」⁷⁰⁾ このことは、日本理解をますます困難とした。

上のような事態は、1924年の排日移民法案をめぐるアメリカ国内の論争において頂点に達した。議会公聴会における日本移民問題についての討議は、必然的に「日本人の心」に関する、さらに広い問題にまで発展した。そして日本人は、排日論者の言うように同化能力を全く欠いているのか、それとも親日論者の主張するように驚くべき順応性を持っているのか、鋭く意見が対立したのである。

おもしろいことに、日本人非同化説をとる人々は、口をそろえて日本の「すばらしい進歩」をほめたたえ、日本人の資質に「深い敬意」をあらわした⁷¹⁾。他方同じ排日主義者たちによれば、日本人は「遺伝形質、生活水準、思考様式、心理」などの面で西洋人とはなんらの共通点も持っておらず、したがって欧米の生活や伝統に順応・同化することは全く不可能であった⁷²⁾。この考え方は、カリフォルニア州民の偏見に最も著しかったが、それが「不解な日本人」のイメージと結びついたとき、より広く受け入れら

68) *Ibid.* vol. 116 (Jan. 1920), pp. 4-5, editorial; Fred B. Smith in *Christian Work*, vol. 112 (Feb. 18, 1922).

69) *Ibid.*, vol. 111 (July 16, 1921), p. 85; *ibid.* (Oct. 21, 1921), pp. 541-42; *Missionary Herald*, vol. 116 (Sept. 1920), p. 426; *ibid.*, vol. 117 (Dec. 1921), p. 402; *ibid.*, vol. 121 (Nov. 1925), p. 513,

70) Memo, July 31, 1919, Papers of Robert Lansing (Library of Congress); Nelson T. Johnson and Edwin Neville, “Japanese Propaganda”, Papers Relating to the Pacific, Washington Conference file (National Archives); Marcosson, “The Changing East,” p. 4.

71) *Japanese Immigration Legislation, Senate Hearings*, p. 39. Statements by V. S. McClatchy and U. S. Webb.

72) *Ibid.*, p. 4, McClatchy’s statement; *Hearings before the House Immigration Committee*, 68th Cong. 1st sess. H. R. 5, H. R. 101, and H. R. 561 (Washington, D. C., 1924), p. 91,

れるようになり、日本に関するアメリカ人の国民的イメージに影響を及ぼしたのである。たとえば、ある排日論者は、日本人の非同化性をじかに確かめるためには、一度日本に住んでみて、日本人とほんとうに打ち解けた交わりを持つと試みるがよい、と証言したが、われわれはこの発言の中に、日本旅行記が作りだしたイメージの反映を見ることができると述べている⁷³⁾。

他方親日家の主張は、すでにみたように、広い説得力を持つにはあまりにも片よった日本弁護に走る傾向があった。彼らは日本人の摂取・順応能力をいささか誇張して、日本は「西洋の最もすぐれた点を常に生活の中に取り入れ」、その結合の中から、最高の精神文化を作りだしていると述べた⁷⁴⁾。このような日本賞賛は、日本に対する疑いを解くどころか、かえってその反動として一部アメリカ人の排日偏見を強める結果となった。

1924年の移民法の成立は、もちろんアメリカの内政上の複雑な事情によるものであったが⁷⁵⁾、それは、ある限られた意味で、ロマンチックな色彩を払拭した異国的イメージ——「不可解な日本人」像——が、順応性に富む近代的日本人のイメージに対して優位を占めたことを意味するといえよう。

1920年代が進むにつれて、紋切り型の二つの日本像ではなく、より立体的で成熟した解釈を行なう傾向が、一部の知識人の間に見られるようになったが、日本に対するアメリカ人の反応のしかたは、おおまかにいって四つの類型に分けられよう。

まず第一は、極端な対照と矛盾に満ちた島国に対する単純な好奇心と興味である。優美な庭

園と黒煙を吐く工場、お人形と近代艦隊とを同時に心に描くことは、アメリカ人にとって想像力を新たに拡大することを意味した。しかし、多くの場合このような対位法は、新旧二つの日本の対照をおもしろがるという、ごく皮相な態度に終わったのであった⁷⁶⁾。

親日的な知識人たちは、日本を一つの理想像——東洋と西洋の出会いの場——としてながめた。この見方によれば、世界を一つに結ぶという20世紀の課題にこたえて、日本は東西文化の「かけ橋」、「偉大な仲介者」となるのに申しぶれない立場にあった。このような思想は、すでに19世紀において Walt Whitman や Ernest Fenollosa の著作の中にあらわれているが、この見方が特にアメリカ人に強くアピールしたことは、アメリカ人の自国像から理解できるように思われる。彼らはアメリカをヨーロッパの諸伝統のつぼと見、旧世界との出会いの場といった概念で説明していたのである⁷⁷⁾。第三に、上の理想像とは正反対に日本の試みを、あわれむべき失敗とみる解釈があった。それは日本の「雑種的な精神」と「混乱した心理」を批判し、日本は未消化の欧米文明の中に自己の同一性を見失っていると、こきおろす立場であった⁷⁸⁾。

最後に、一部の知識人の間に徐々に芽ばえつつあった態度は、日本の近代的発展に対してじゅうぶんな評価を与えるとともに、急激な変化から生ずる深刻な問題を同情的に理解していこうというものであった。Dewey は、日本が「分裂した生活の生み出す緊張を、いたるところにあらわしている」ことを指摘して、次のよう

76) *Independent*, vol. 110 (Jan. 20, 1923), p. 43; *Nation*, vol. 123 (Dec. 22, 1926), p. 652; Ellery Sedgwick, "Made in Japan," *Atlantic Monthly*, vol. 146 (Oct. 1930), p. 463.

77) *Independent*, vol. 107 (Dec. 24, 1921), p. 308; *Nation* (March 25, 1925), p. 309; Sunderland, *Rising Japan*, 4. Miner, *The Japanese Tradition in British and American Literature* (深瀬他訳), p. 319 はこの点に触れている。

78) William Irvine, "The Hybrid Soul of Japan," p. 1049; Greenbie, *Japan, Real and Imaginary*, 422,

73) *Japanese Immigration Legislation, Senate Hearings*, pp. 40-41. Statement by Webb.

74) *Ibid.*, pp. 80-82, 85, 87, 89, 104-105 for statements by Gilbert Boweles and David B. Schneder.

75) 最近の研究では、Roger Daniels, *The Politics of Prejudice: The Anti-Japanese Movement in California and the Struggle for Japanese Exclusion* (University of California Press, 1962) が詳しい。

な予言的観測を行なっている⁷⁹⁾。

「アメリカは日本を恐れるのではなく、日本を気の毒だと思い、少なくとも同情すべきである。……日本が多くの点であまりにも急速に、しかも準備なしに一等国に成り上がったことは、日本の国民にとってまことに不しあわせなことなのである。一等国の評判を落さないようにやっていくことは、たいへんな仕事であり、彼らはその重荷によく耐えきれず、ついには破綻をきたすかもしれないであろう。」

しかし、このような深い理解は、1920年代には至極まれであった。大多数のアメリカ人は、依然として日本を手放しでほめそやすか、全面的に非難攻撃するかの極端に走ったのであった。彼らにとって日本は、あいかわらず異国趣味と芸術美の淡いムードか、ヒステリックな恐怖の対象のいずれかであり、日本人はラフカディオ・ハーンの世界に浮動する妖精か、超人的な能力を誇る獯猛な矮小民族であった。1920年代を通じて一般アメリカ人の日本観には、基本的な変化や展開が見られない。また当時の地理歴史の教科書にあらわれたイメージも、二十一箇条や山東問題に新しく触れている点を除いては、20世紀初頭のものと同じく変わっていない。

× × × ×

ここで、問題の核心に触れるいくつかの疑問をあげてみよう。1920年代には、日本がすでに工業化の相当進んだ段階にあったにもかかわらず、多くのアメリカ人が、ロマンチックな「古い日本」のイメージを執拗に抱き続けたのはなぜだろうか。「友好協調時代」と呼ばれる20年代に、日米戦争不可避説が幾度となく頭をもたげたという現象は、どのように説明すべきであろうか。そしてこの二つの対照的な日本観が、アメリカ人の間に並存していたこと、そして日本の進歩に対する彼らの反応が、多分に分裂症的なものであったことは、どのような理由によるのであ

79) Dewey, *Letters*, 80; *Dial*, vol. 67, p. 285, 334.

ろうか。一般的に1920年代は、対外政策の面では孤立主義の傾向がみられ、内政面では移民制限が制定されたり排外思想が高まったりした時期であるが、この時代にアメリカ国民が、はるかな日本に対して驚くほどの興味を示したという事実をどう理解すべきであろうか。このような数々のパラドックスを説明するためには、それらを1920年代におけるアメリカ社会・文化の文脈の中で考えてみなければならない。

前にも少し触れたように20年代のアメリカ国民は、一方では新しい産業主義の受容を余儀なくされつつも、他方では古い田園的アメリカ像にしがみつこうとしていたので、当然そこには社会的緊張が生じた。さらに、昔のアメリカとその価値観を復元しようとする動きも見られたが、この種の衝動が、20年代の特徴的な諸現象——禁酒法、移民制限、Ku Klux Klan、「赤の恐怖」、進化論をめぐる Scopes 裁判など——の根底に横たわっていたのである⁸⁰⁾。

いうまでもなく、ノスタルジアは20年代の特殊現象ではなく、過去の中に純真無垢の牧歌的楽園を見る傾向は以前から存在していた。アメリカ人が、「古い日本」、またそのシンボルとしての「日本の庭園」に強くひきつけられたことは、彼らの田園的ノスタルジアの一つのあらわれとみることができる。幼い日の夢想の国、人形やちょうちんに連想づけられた日本への憧憬は、彼らの子供時代のアメリカに対する郷愁につながるものであった。言いかえれば、ロマンチックな日本像は、「失われた時を求めて」過去を想像の中で再創造しようとする衝動に支えられていたのである。

1920年代の特殊性は、変化のピッチが一躍加速度的に上がったため、懐古的傾向がいっそう強くあらわれてきたことである。当時の年配層のアメリカ人が、自分たちの生きてきた時代にあらわれた技術革命に対して、どのように反応したかによって、彼らの日本像は大きく規定さ

80) Leuchtenberg, *The Perils of Prosperity*. 20年代のエトスを知るには、ジャーナリスト Mark Sullivan の愉快的編年史 *Our Times: The Twenties* (N. Y., 1946) が不可欠である。

れた。この比較的短い期間のうちに、日本は半ば伝説的な島から「最も進歩的な20世紀国の一つ」へと大躍進を遂げたが、この「信じがたい」変化は彼らアメリカ人にとって、現代世界の「目も眩むばかり」のテンポを象徴しているように思われたのである。1920年代のエトスは、次の引用文にしみじみも言いあらわされている⁸¹⁾。

「わたくしのように、まだ日本が實際上、近代世界の地図にかき入れられない以前、つまり日本の国民がきびしい禁令によって外国との交渉から遮断されていた時代に生を受けた人間にとっては、この出来事〔日本の発展〕ほど如実に、時の流れにのせて人類を押し流す、たゆみない変化の風潮を示すものはない。」

「わたくしはまだ白髪の齢でもない。しかし、われわれの知っている新日本は、わたくしよりたいして年を経ているのだ。」⁸²⁾ Alfred Stieglitz は、いまや五年ごとに新しく世代が交替する時代になったと評したが⁸³⁾、この変革のペースは、全く新しい時間概念を要求するよう思われた。

変化の趨勢は、彼らアメリカ人の住み慣れた安定した世界を破壊しつくすまで、行きつくところを知らないようにみえた。20年代の予言者といわれる Henry Ford は、「機械こそ新しい救世主だ」と告げたが、彼の福音に耳を傾けなかった人々は、人間が機械によって奴隷化され、ついには単なるロボットと化すのではないかと考えた。彼らはこのような未来像に対して戦慄を禁じえなかった。アメリカ人が近代日本の「能率」を誇大視し、それに恐怖をいだいたのは、一つには工業国としての日本像と、それに関連するイメージが、あたかも非人間化された明日の「すばらしい新世界」を予示しているよ

うに思われたからである⁸⁴⁾。

過ぎ去った時代の一つのシンボルであった日本は、また同時に今日的世界の象徴でもあった。過去と未来とに対するアメリカ人の相反する心的態度が、それぞれロマンチックな日本像と近代工業国のイメージの根底に横たわっていた。このことが、日本の進歩に対する賞賛と旧日本への執着とがアメリカ人の間に並存していたこと、また彼らの日本観が桜の花びら式異国趣味と黄禍の恐怖とに両極化していたことを説明するのである。

以上、アメリカ人が、日本を媒体として自己の欲求や願望をさまざまなイメージに投影したさまをながめてきたが、それは現実からの空間的逃避といった性格を多分に帯びたものであった。20年代を風靡していた「ビジネス文化」に対して強い疎外感を抱いた知識人は、アメリカにすっかり幻滅していた⁸⁵⁾。彼らはこの画一化の時代、冷たい機械文明の中では人間の想像力、創作的精神、美的感覚、さらに生命力すらが麻痺しつつあると感じた。「物質主義の楽園」からのがれたいと願う彼らは、国外の文化に目を向けるようになった。作家たちがパリの Left Bank に自由な生活を求め、画家たちがメキシコやコンゴの原始的な美術の中に強烈な活力を求めたのと同様の衝動が、日本を訪れるアメリカ人や、「日本もの」に興味をもつ人々の中にもひそんでいたのである。彼らにとって、日本は芸術的ユートピアであった。日本という国は、

84) イギリスの作家 Aldous Huxley の風刺小説 *Brave New World* (1932) では、“Our Ford” が神とあがめられ、「モデルT」大衆車にちなんで、“T”が十字架の代わりとなっている。

また、「ロボット」という言葉があらわれたのも1920年代であり、その起源は、Theatre Guild による *Rossum's Universal Robots* (原作 Karel Čapek) の上演に求めることができる。

85) Harold E. Stearns, ed., *Civilization in the United States: An Inquiry by Thirty Americans* (N. Y., 1922); Henry May, ed., *The Discontent of the Intellectuals: A Problem of the Twenties* (Chicago, 1963); George E. Mowry, ed., *The Twenties: Fords, Flappers & Fanatics* (Englewood Cliffs, N. J., 1963),

81) “Japan in World History,” *Contemporary Review*, vol. 132 (Sept. 1927), p. 296.

82) Sedgwick, “The Japanese Mystery,” p. 293.

83) Cited in Leuchtenberg, *The Perils of Prosperity*, 11.

アメリカの現代生活から失われつつあるように思われた夢の世界と幻想の感覚とをよみがえらせるための、一つの糸口となったのである。

このような日本が知識人に対してのみ訴えたのではなくて、大衆的イメージの中にも映しだされていたことを以上みてきたのであるが、いま一つの例として、20年代に広く流行した“The Japanese Sandman”「日本の睡り魔」という歌がある⁸⁶⁾。

Here is the Japanese Sandman
Sneaking with the dew,
Just an old second-hand man
He'll buy you old day for you.

20年代も半ばを過ぎると、物質的な豊かさへの喜びもやや色あせ、生活の目まぐるしいテンポと煩雑さに倦み疲れたアメリカ人は、落ち着きを求めるようになる。日本は、彼らの精神的な負担を一時忘れさせてくれる「心の願いの岸」であった。

× × × ×

アメリカ人の日本像は、自分たちのさまざまな欲求によってあまりにも強くいろいろとられていたため、正しい日本理解を妨げ、政策決定のうえでも現実的な見解を困難にした。その最も著しい例は、すでに触れた排日移民法であった。イメージと外交政策の相互作用の研究は資料による精密な裏付けを必要とするが、この試論の目的はイメージ自体の分析にあるので、ここではごくおおざっぱに問題を指摘するにとどめる。

1920年代におけるアメリカの対日政策は、相反する日本観の不安定な結合の上に立てられていたため、一貫性を欠く曖昧な性格が顕著であった。一方では、実業界や知識人の意向を反映する共和党の有力者たちが対日接近を説いていた。彼らは日本の自由主義勢力を高く評価していたので、友好外交によって日本の政策をリベラルな方向へ持っていくことを望んだ。他方、

86) Sullivan, *Our Times: The Twenties*, 464, 467. “Sandman”とは、おとぎ話にでてくる、子供を眠たくする睡魔である。この流行歌は1920年代に350万部も売れた。

海軍はいうまでもなく、国務省の極東専門家たちの間には根強い対日不信感があり、それが積極的な日米協調を妨げた。彼らは強硬な政策によって日本軍部の膨張計画を挫折させ、間接的に穏健派を援助することを主張した。ワシントン会議当時、そして20年代を通じて、このような二つの見解が整合されて明確な基調が打ち出されることがなかったことについては、他の機会に述べた⁸⁷⁾。「真珠湾への道」においてアメリカの政策立案者や外交官がとった態度についても、対立的な日本観の交錯という観点から示唆に富む解釈が可能であろう。

太平洋戦争中は、かつての黄禍論を思わせる野蛮で非人間的な日本人のイメージが支配的であったが、戦後では James Mitchener の『サヨナラ』(1954)にみられるロマンチックな異国像、いけ花や歌舞伎に代表される芸術国日本の影像が復活し、新しいところでは、偉大な産業的組織力を誇るオリンピック開催国のイメージがある。ペリー提督以来アメリカ人の日本観の中には、いくつかのありきたりの固定型があたかも走馬灯のように周期的にあらわれてきたが⁸⁸⁾、同様のことはまた、日本人のアメリカ像をとってみても言えるであろう。

激変する今日の世界において他の国と正しいつき合いをするうえで、時代おくれの硬化したイメージができるだけ排除されねばならないことは論を俟たないが、そのためにはまず、われわれの抱いているイメージがどのようにして形成され、またそれがどのようにわれわれ自身の欲求を満たし、思考や行動に作用しているかを知る必要がある。結局それは、自己認識の問題といえよう。

87) 前掲論文「妥協の外交」。“Japan and the United States, 1915-25,” Ph. D. thesis, Yale University, Sept. 1962.

88) この論文でみたような両極化された二重の日本像は、後の時代にまで影響を及ぼし、たとえば Ruth Benedict が文化人類学的研究 *The Chrysanthemum and the Sword* (Boston, 1946) において用いた二重の比喩にもその反映を認めることができる。Miner, *The Japanese Tradition in British and American Literature* (深瀬他訳), pp. 39-40.